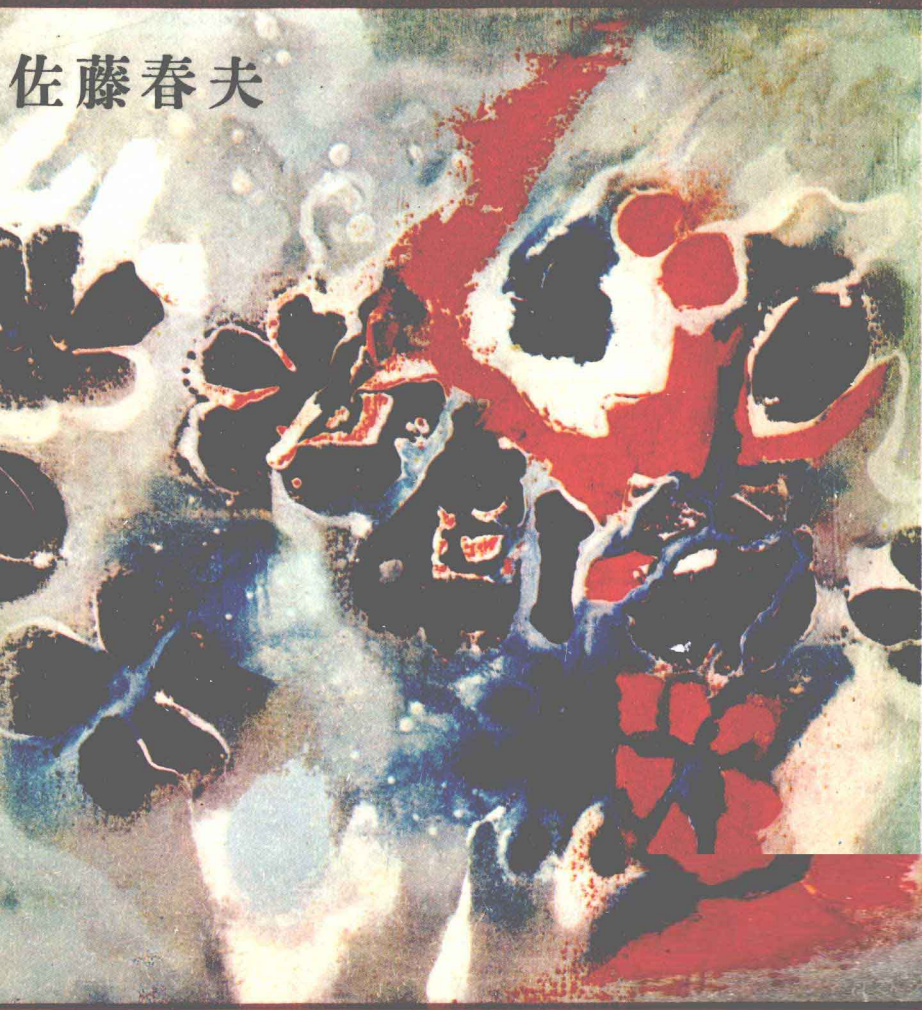
美女日本史

KAWADE SKE PAPER BACK

佐藤春夫



河出書房新社

長篇小説

美女日本史

佐藤春夫

河出書房新社

Kawade Paperbacks 62

美女日本史

表紙繪　西村計雄（在パリ）

昭和38年 9 月15日　初版印刷
昭和38年 9 月20日　初版發行

定價 280 圓

著者　佐藤春夫
發行者　河出孝雄
印刷者　堀鐵判

發行所　東京都千代田區神田小川町3の8　株式會社 河出書房新社
電話 東京(291)3721～7
振替口座（東京）10802

© 1963

印刷・株式會社文弘社

落丁本・亂丁本はお取り替へします

はしがき

「美女日本史」といふこの稿は當分ここに連載される。これはわが國、世々の女性、それも老若貴賤、なるべくさまざま、多方面にわたつて、それぞれの時代を象徴すると思はれるのを擇んで、これを短篇小説化してお眼にかけるつもりである。今のところ上古から近代に及ぶ二三十人の女性を考へてゐるから、もし讀者が飽きないならば一二年は書きつづけることになるかも知れない。

時代相は微力菲才の及ぶかぎり正確にと心がける。とは言へ、これは決して歴史小説ではない。史實は一とほり調べてみるが、なるべく歴史ばなれしたいのが作者の念願で、例によつて根も葉もある嘘八百でゆきたいといふのが理想である。

だから、歴史小説といふよりも、むしろ史的幻想であつて詩的小説になるものと思はれる。だが、時には事實は小説よりも奇なるものを見出して、空想も及ばないと感じたならば、これはそつくり歴史そのままのものにしないとも限らない。

また史上人物と言つても、嚴密には史上人物ではなく、明らかに傳説や神話の人物、さてはまだ神話や傳説といふまでの年輪を持たない過去の架空人物でも、その時代を最もよく象徴すると思はれる女性に遭遇した場合には、これをさへ史上人物なみに取り扱ふかも知れない。

すべての點で、無軌道なほどわがままなことをするものとご承知おきいただきたい。こんな心がまへだから小説とは約束しておきながらも、童話や民話みたいなものができあがるおそれも無いではあ

るまい。わたくしは規約的な統一よりも、むしろ變化を喜び樂しむ者だからである。奔放不羈といふと賴もしげに聞えるが、ただの非常識なのか、知れたものではない。

* * * *

前に掲げたのは、わたくしがこの稿に取りかからうとするに當つて第一回のはじめに記したところで、言はばまあわたくしの最初の心構へ意氣込みといふべきものであつた。

これらの諸作は昨年三月以降の一年餘を月々一篇づつ書き續けて成つたものであるが、書き終つた後に書きたいことはまた別にある。

わたくしははじめこれに「千紫萬紅」といふ題をつけたのが編輯部では氣に入らず、すつたもんだの末今のやうな題に變つてしまつた。思へば、その時斷乎としてことはつてしまへばよかつたのを、最初になまなか妥協したのが最後まで禍して、作者よりも讀者にサーヴィスすることを旨とした編輯部は必ずしもいつも作者に對して協力的であつたとは言へない。書きにくいことが多く、もうやめたいと思つたことも何度であつたがどうやら頑張りつづけた。

仕事が困難なため、依怙地になつて困難に打ち克たうと頑張つてわが最初の意氣込みを果しただけで、編輯者や讀者に義理を立てたわけではなかつた。わたくしには由來、さういふサーヴィス精神はまるでないのだから。

篇々みな多くの苦心の末に成つたが、わたくしの場合苦心すればするほどふできになるやうな奇現象がある。樂しんで書かず苦しみが多かつただけにでき榮えも、多くの場合あまり滿足ではなかつたが、一本に纏めて見たら、さう悲觀することもないと自ら慰めてゐる。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

苦い藥を飲むやうな仕事ではあつたが、おかげで、無學なわたくしも國史に對する知識を新たにするものが多かつた。忠實な讀者なら、この點ぐらゐは認めてくれるであらう。

美女日本史といふのは、もちろん日本の美女の歷史ではなく、女人を通してみた日本史の意味で、さう取つてもらへば、千紫萬紅よりかへつて適切な書題と考へて、今更これも改めないこととした。

一九六三年七月七日

吾春山房にて　佐藤春夫しるす

目次

はしがき　九
第一話　つくしの國　三
第二話　歌垣少女　一四
第三話　にほへる姉妹　二七
第四話　不安の皇后　四七
第五話　野の女　七一
第六話　鬼形の女　八四
第七話　嚴島の内侍　九七

第八話　親鸞の妻　一三
第九話　時頼の母　一三六
第一〇話　恩賜の愛妻　一四三
第一一話　犬亦不食草子　一五七
第一二話　歌舞伎事始　一七二
第一三話　散る花　一八四
第一四話　説話の女　一九八
第一五話　都の松風　二一〇
第一六話　よもぎふ日記抄　二三三

美女日本史

——千紫萬紅

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

つくしの國

神功皇后と卑彌呼

一

最初に神功皇后について書かうと思ふが、この神話的貴婦人に對して、どれぐらゐの年代を設定したらいいものやら甚しく迷ふ。

神話に歴史の假面をかぶせることは、おとぎ話を科學的に立證することなのだからむつかしいはずである。

ままよ、大膽に決めてしまはう。史家は默つてゐて下さい。ほぼ紀元三四〇年を中心にその前後二十年の幅を見ておけばよからうか。

ところが大和地方に部族同盟國家が成立したのは考古學上、前方後圓墳の成立、その他から見て、ほぼ紀元三〇〇年で、どう見ても五十年とは遡ることはむつかしいとか。これを記紀にあててみると崇神天皇のころとなり、その後、急激に加速度的な發展を遂げたといふことになる。さうして天皇の代數や年代などにも大ぶんくるひが出てくるかも知れないが、この小說では、四世紀の中葉を仲哀天皇の時代として、また日本といふ國家がやつと緒についたばかりのころのことであるとする。

そのころ海をへだてた朝鮮半島の南部は北九州とは一帶で、部族たちは連合して同盟を結んでゐた。その半島の中部山間の西北に發して秋風嶺の北麓から大辻囘して慶州の附近を迎日灣に注ぐ洛東江がある。その中流の慶州附近で三叉になつた谿谷の兩岸に宅を造り江水をひいて田を墾した部落が、流れに沿うて二つづつあつたのが、互ひに親密に相往來するうちに、この六つの部落が同盟を結んで一國となつた。さうして、この一小國を斯盧と號した。

斯盧には以前から鐵鑛があつて、その鐵は質が堅く、さまざまな器具を造るに堪へて、或は農耕具となり、或は尖鋭な武器となつたばかりか、それを板狀の小片にして遠近の諸物資と交換してゐた。この鐵鑛の恩惠で斯盧は國外の物資を集めて富み、國の農工業は盛んに、國力は年々に隆盛に赴いた。斯盧ではその優秀を誇る農耕具の利用だけでは滿足せず、更に優秀を誇る武器を近隣の國でためしてみ

たいといふ欲望が旺んになつた。國内の資力と威力とが溢れ出して四隣を追々と壓倒しはじめた。斯盧はやがて辰韓となり後年の新羅の起源なのであつた。

辨韓、後の加羅すなはち任那は、地理的にも北九州とは近接して部族は最も密接な關係にあつたから、北九州の民で海を越えて來てここに居住する者も多少はあり、海波をものともせずに相往來して、斯盧の鐵板などもそこを通して手に入れてゐた。それで、年々膨脹する隣國斯盧の猛威によつておびやかされるこの地方の消息を訴へるともなく洩らすのが、風の便りとなつて北九州へも聞えてゐた。やがてそれがさまざまな流言蜚語を生んで、その影響が連鎖反應を呼んだ。機會があれば擾亂を思ふ熊襲の蠢動を促し誘ふのであつた。

熊襲はその僅かに三十年かそこら前、前々朝の景行天皇の時代に、大和朝廷から派遣された少年皇子小碓、すなはち日本武尊によつて一時すつかり平定したやうに見えてゐたが、それはほんのうはべの話で、亂を好む彼らは今も離叛の機をねらつてゐるのであつた。

二

この時、當代の仲哀天皇は即位の二年目であつたが、その二月、たまたま角鹿（福井縣敦賀市）に笥飯宮といふ行宮を營んでここに移り、皇后もここに伴つてゐた。この天皇は劍と戀との詩人であつた小碓尊の皇子であるが、父の尊の性格をうけてか、天皇も亦詩人的な性格のお方であつたと見える。

天皇は即位以來、都に落ち着くこともなく轉々と慌しい生活をなされて、今笥飯宮に居られたのであつた。

天皇は幼少で失はれた父の尊を追慕すること甚しく、ご即位とともに世にも異常な詔を下したものであつた——

「わが父の尊はわれらが地上をかなたこなたと追ふのをも見捨て、白鳥となつて高く天がけり給うた。白鳥は忘れる日とてもない。今もまだ眼の前にある。われは父戀しさに白鳥を飼つてこれに仕へたいと思ふ。わが志を憐れむ者は、幼時わが追うて終に捕へ得なかつた白鳥をわれに代り捕へて奉れ」

と仰せ出されたのであつた。天下にこの詔に心をうたれた者が尠くなかつたなかで、越の人が白鳥を生捕つて獻上しようと都のほとりに辿りついたところを、ひとりの弓矢を携へて狩に出るらしい貴公子に出會つて、籠のなかの白鳥に目をつけられ、これを召し上げられさうになつたので、それは、お上の御用に苦心して捕へたものだと事こまかに述べてみたが、この行きずりの貴公子はただ一笑に附し、鼻であしらひ、

「ふむ、白鳥だつて焼いてしまへばただの黒鳥なのさ」

と云ひながら、越人の手から白鳥の籠を手荒らにもぎ取り、見返りもしないでゆつくりと立ち去つた。

日の暮れのわびしい冬野の道に呆然自失してゐた越人の口から事の次第を聞き知つた者が越人を伴つてこれを役人に引き渡すと、役人は朝廷へ申し出た。これを聞こし召された天皇は、いつに似ず異常にお怒り召されて、その素姓も知れない若い貴人といふのを探し求めさせると、父のみ魂たる白鳥を焼くなどと云つた奴が異母弟の蒲見別王であつたと知れて逆鱗は更に油を注がれた。さうして越人は篤くねぎらはれる一方、白鳥を純朴なまごころの深い越人から奪ひ取つた不埒者の命は直ちに取らせるやうにと命じ給うた。この天皇はさういふやさしくもあり、激しくもある性格の方であつた。さうして皇后に對しては、その優にやさしい面が特によく現はれたといふ。

三

斯虛が日々に強大になつて四隣をおびやかす半島の近況は、海峡をさしはさんで遠くもないだけにここ角鹿にもよく聞え、笥飯宮の天皇のお耳にも入つた。天皇は皇后がもと半島の、それも斯虛地方第一の豪族の血をひいてゐただけに、半島の近況には特別の關心を抱いて居られる様子は側近の寵臣武内宿禰の眼には歴々と看て取られた。

二月も末に近い一日、天皇が宿禰を召してひそかに謀議あそばされたところは、思ひがけなくもあまりに重大なことで、あらかじめうかがひ知るべくもなかつたことでもあつたし、さすがに豪氣な武内宿禰にも、すぐには輕々しく何ら奉答することもできなかつた。さうしてその場では、何はともあれこの際、一度温暖な木(紀)の國へでも幸し給はつて、ゆるゆるとお考へ遊ばされてはいかがであらう、とだけ申し上げたのであつた。宿禰は内心に決したところが無いでもなかつたが、それを申し上げる前に、これをもつと具體的に考へておきたいことがあつて、その間、天皇を餘寒も知らず春の早い木の國へお迎へしたいと思つたのであつた。木の國の海草郡は宿禰の故郷の地なのである。

そもそもこの武内宿禰といふ上代でも有數な傳説の大人物は、神武天皇の東征に際して水先案内をお仕へした宇豆比古が、その勲功によつて後に木の國造になつたその舊い名門の出であつた。その母は何代目かの宇豆比古の孫、山下影日賣であつたが、父は孝元天皇の皇孫もしくは曾孫であつたらしい。

木の國造は、この半島の西北部、紀淡海峡に近い南面の地、海草郡に一族が繁榮してゐた。始祖以來、海を家として海に生きた家柄として、その多くは海濱に居住してゐた

が、宗家ばかりは、海濱の家とは別にまた山麓の地に、貴族並みの宏壯な高床の屋を設けて女子供をここに住まはせてゐた。山下影日賣はこの屋内に生れ、そこに育つたので、この名で呼ばれるやうになつたのである。もしもう一時代早く生れてゐたならば、當然女家長としてこの大家族を統率したのであつたらうが、時はあたかも母親の權力がくづれる時代で、父親が幅をきかせはじめてゐたから、彼女の權威もほんの一家の内部だけに限られてしまひ、公事や戰のことは今やその長男の一子、すなはち武内宿禰にまで移つてゐたのである。宿禰はこの公人としての姓ばかりで傳はつて、一族中の呼び名を何と呼ばれたかは明らかでない。思ふに、都に出て朝廷の重臣ともなつた彼を輕々しく一族の呼び名で呼ぶ人も無かつたままに、それは自然消滅のやうな形となつて傳はらなかつたのでもあらう。

ともあれ、海の人々たるこの一族は、漁業によつて海洋の富を集めては富を成し、また四季をりをりの海の幸を、大和川を遡つて大和朝廷に獻じたり、さては一族の壯者たちは海上に兵を練つて水軍を習ひ、有事の日に備へたり、なかの不逞の徒は海賊なども働いてゐた。——部落の船の大部分は國つ神の社の保管に屬して勝手に使ふこともできない制度ではあつたが、一朝有事の日にはこれらの船の出動とともに部族の男子は役にまた丁に召され、これを統率するには部族の長たる首領がこれに當るのだから、この首領を統率する同盟の王者武内宿禰はまた、やがてその水軍の提督にも當るわけであつた。現に、先年も吉備の征服に當つて出動して功をなさめたのも、この木の國海草郡の水軍、武内提督の一族が主であつた。天皇が彼を信賴するのも當然なのである。そればかりか宿禰は前朝成務天皇とは、出生の月日をたまたま同じくしてゐたといふので、前朝以來、特別の恩寵をいただいてゐたので、仲哀天皇にとつてこれは前朝以來の元老といふわけであつた。

天皇は宿禰の言上のままに、北陸は風雪もまだ穩やかならぬ三月の十五日、南海のたけなはな春を迫ふともなく、皇后や百官はそのままに殘し置かれて、二三の側近や少數の舍人たちだけを從へて笥飯宮を發して、木の國へ幸あつた。

宿禰は一族の村に近いあたりでも最も要害の風光すぐれた地を撰んで、入江の波しづかなほとり德勒津に宮造りして天皇を迎へ奉つた。

宮は一族總がかりの突貫工事でまたたくうちに完成した。その間にも宿禰は一族中の主だつた者たちとひそかに協議して出動の計畫にをさをさ怠りもなかつたが、一日、新築の成つたばかりの宮に伺候して、

「臣思ふよしあつて、四五日のあひだおん遑を賜はり、

牟婁の國がり出で立ちたくおんいとまを」

と申し出たが、さて四五日の後、彼は無事に歸つて、

「復奏申す。さすがに熊野牟婁の國は海國のなかの海國、船も舟人も滿ち足り居り。これにてわが國にて足らぬ船も舟人もすべてととなひ、波風も仇も今は早、おそれ坐さじ。み心のままのこと、いざ仰せ出されよ」

と奏しながらも、宿禰は内心に、これで途すがら吉備の國々で船や人を、更につくしの國々で船と人とを召し集めれば、兵の數には不足もないが、首腦部がまだ少々心細いと思はないでもなかつた。皇后は世にもすぐれて健けく智謀のお人に在すが、根が女性でもあり、天皇とわが身とだけではとためらはれた時、端なくも、いつの日であつたか東國の行方の國で見た中臣烏賊津を思ひ出した。

官命で東國を視めぐつた若い日にめぐりあつた人物であり、あの頃はほぼ同じ年ごろで相親しんだ間柄であつたが、彼も今は頭に霜をいただきはじめたでもあらうか。いつまでも鬼の住む東國で老い朽ちさせるには惜しい彼である。招けば來てよい相談相手にもならうといふ男。この機會にこれを天皇に推擧してみようと、

「東の國の行方といふのに、中臣の烏賊津と申す者が居り坐す。香取鹿島の神の審神者にござるのが、まことに心利いた人がらで、それに諸國の言葉をよくする舌人にて、諸國の役を集める今日お役に立つ者と思はれ」

と宿禰は、少壯で彼とともに東國の筑波の山、新治の野などを歩いた日のことどもを思ひ出のままに申し上げると、天皇も一議なく、

「その者、召せ」

と仰せ出されるのを待つて、宿禰は一族のうちの若者を撰び命じて、烏賊津召し出しの船を發たせた。さうして彼を待つうち、ここに思ひがけない事がもち上つた。といふのは、熊襲が叛亂を起したと聞えて來たのである。

天皇は父の尊が平定しておいた熊襲の叛を聞こし召されると、この討伐には奮ひ立たれ、宿禰に命じて直ちに兵を發しようとの仰せであつた。天皇はおん父が少年の日、武名をかがやかした土地をご覽になるのがなつかしく、同じ敵を討つことに妙な張り合ひが出て、喜ばしいやうな不可思議な氣持で出陣を急がれるのであつた。

宿禰は天皇の仰せを畏んで、熊野の船をも烏賊津をも待たないで、木一國の船五十艘あまりを總動員した船團を德勒津から直ちに出發させた。熊野の船や烏賊津が來たら筑紫へ追ひかけて來るやうにと言ひ殘すと、

「つくしはどこの津でせう？」

「たはけたことを申すな。津々浦々は探さずとも大王のみらせられるところと聞けば、すぐわかるわい」

と叱りつけて、船團を朝日を浮べた初夏の海に、瀬戸内へ急がせる。

豫定のとほり吉備の津を經て、穴戸（長門）の豐浦津（下關）に到つてここに豐浦宮を造り、皇后を筥飯宮からこの宮へ召し迎へた。

皇后氣長足姫は神がかりのする神祕的なお方で、その行くさきざきに奇異が生じたらしく、さまざまに異常な事どもが多く傳へられてゐるが、現に角鹿から豐浦までの水路にあつても、淳田門（福井縣にある海峽）を行く船の上でも、お食事中、お口をつけた殘りの酒を海中に流し捨てると、あたりにゐた鯛どもがみな陶醉して水面に浮び上り、パクパクと口をあぎとひ動かしてゐるのを舟人はわけなく手づかみしたといふし、またお船がいよいよ豐浦の津に入らうといふ時、龍王が腦中から如意の珠を出して捧げたとも傳へられる。龍王の如意珠といふのは鹽椎神の鹽滿珠、鹽涸珠のことなので、これを持つ者は火も燒く能はず、毒も犯す能はずとされた寶珠であるといふが、土佐國風土記によると、皇后はこの時海中からみごとな鮑白珠（眞珠）を得られたもののやうである。

四

氣長足姫は開化天皇の曾孫で、近江（滋賀縣）坂田郡おきながの地に居住された氣長宿禰王と葛城高額姫との間に生れた女子で、父王とともにその地名をおん名として呼ばれた。その聰明と美とは幼少から父君も驚かれたほどであつたと傳へられる。神がかりしはじめたのはいつのころからかはわからないが、當時にあつて、これは特別に尊重すべき天才と考へられて人を畏服させることができた。かういふわけで姫は二十ばかりのころ、二十あまりお年上の天皇に召し出されたのであつた。

皇后のおん母葛城高額姫といふのも、めづらしい家系の出で、天之日矛の六代目の孫に當る方といふが、これ亦、傳說的人物で、新羅王家の長男があとを弟にまかして、わが國へ渡來したと自稱する放浪の王子であつた。

天之日矛がはじめて半島から軺で渡來し播磨（兵庫縣）の揖保川の川口で、上陸を防ぐ葦原醜男（大國主命の異名）に向つて、

「そなたは、この土地の首領である。わしは宿るところがほしいだけなのだ」

といふと、醜男は、

「では、その海の中にでも宿つたがよからう」

と冷嘲したので、日矛はいきなり劍を拔き放つて海水を押し拂ひ、宿る氣色に、醜男は氣を呑まれ、勢に壓せられて、みすみす上陸を認めざるを得なかつた。さて上流の地

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com